

若梅健司のトマトーク

現場で見たトマトの生態

4

●仕立て方のいろいろ

トマト栽培にあれこれ方法があるように、さまざまな仕立て方があり、1本仕立て、2本仕立て、多本仕立て、低段密植、連続摘芯、Uターン整枝、ぶっ倒し栽培などがあります。

普通、1本仕立てが基本ですが、最近は病害に強い接ぎ木苗を購入する関係か、2本仕立て、時として多本仕立てもあるようです。

2本仕立て栽培

苗の時点で摘芯後に育苗して植える場合と、定植してから第1花房下の側枝を使う方法とがあります。この場合、側枝は葉が5枚出ないと花芽をつけないので、初期収量は少なくなります。

また、近年は黄化葉巻病が増えていて、発症した株を抜くと倍の欠株となってしまいます。

低段密植栽培

花房1～3段ほどを残して摘芯していく方法で、短期間に密植させた栽培を繰り返します。

圃場のフル回転・短期増収をねらうにはよい方法だと思います。ただし、早めに摘芯するので玉肥大が急に進むため、コントロールが崩れると尻腐れ果・裂果が出やすくなり、注意が必要です。

連続摘芯栽培

花房真下の太い側枝を使って次々と主枝更新をしていく方法で、2花房ごとに摘芯します。捻枝した花房は、玉肥大・形状・着色をよくするため、光線に当てることがポイントです。

Uターン整枝栽培

方法として、直立Uターン・複条Uターン（アーチ型支柱）があります。

私は主に1畝2条植えの複条Uターンで栽培しています。抑制栽培が6～7段程度なので、上部1～2段は交差させ反対側にUターンして栽培します。最上段は通風・採光がよく、果実の肥大や

品質もよくなります。

ぶっ倒し栽培

抑制無加温栽培で後半に寒さが厳しくなると、株を倒して地這い栽培とし、トンネルやベタがけで被覆します。

複条Uターンのぶっ倒し方法は、まず病気を防ぐため下葉をかき上げます。支柱を浮き上げて畠の一方を倒すと、長さ50mのベッドに植えられたトマトが、約10～15秒で瞬時に、ドミノ式に倒れます。倒れるスピードは支柱の浮かし加減で決まります。10aのトマトを倒すのに、準備を含めて1時間くらいで終了します。夜9時の天気予報で、急激な気温の下降がある場合などを見てからでも間に合うでしょう。

千葉県の私が住む産地ではほとんどの生産者がぶっ倒し栽培をしています。倒してから2～3段収穫して年内いっぱい、もしくは年明けまで無加温で収穫・出荷し、総収量の1／3は倒してからの収穫となります。

この方法だと地温でトマトを保護するので、燃料費の軽減につながり、トマトにとっても、もともと匍匐性の作物なので、本来の自然な姿に返せるわけです。



←
ぶっ倒し作業の瞬間。
筆者はこのぶっ倒し栽培が高く評価され、農業技術の匠に選定された。



←
1畝2条植えの複条Uターン仕立て。アーチ型支柱への誘引上部は、両サイドから交差しても日当たりがよい。

ぶっ倒し栽培については「トマト 桃太郎をつくりこなす」

農文協：筆者著に詳しい。（編集部）

わか うめ けん じ
若梅 健司

千葉県農業大学校講師、千葉県指導農業士。農水省認定農業技術の匠。祖父の代からトマトを作り始め、自身も1946年からトマト栽培に携わる。数々のトマト品種の生産に精通し、「桃太郎」は発売のころから作っている。著書に「トマト桃太郎をつくりこなす」（1989年、農山漁村文化協会）がある。

